

## 編集室から

今年の夏は記録的な猛暑だったそうです。各地で観測史上最高気温が次々と記録されました。大変残念なことです。熱中症でお亡くなりになられた方は、新型感染症で亡くなった方を越えているとの報道に接したとき、複雑な心境になりました。

その「暑い夏」の残暑は長引くのだろうと思っていた先月中ごろ、ガクンと気温が下がり始め、みるみる秋の気配。夏の名残の暑さと秋の到来を告げる涼しさの交錯する初秋の風情はどこへやら。「ここから先は、秋です！」とラインを一斉に引かれたかのような季節の変わり目に、この国らしさがまたひとつ、失われつつあるように感じています。大げさでしょうか。

当社の決算は8月末です。先月より、新しい会計年度が始まったことに合わせるかのように電子機器類が不調となり、新調され交代していくさまは、何か周りが大きく変わっていく前兆のような気もしています。大げさでしょうか。

その一方で、変わらずに支え続けてくれるものやひと。このニュースも今となっては古いソフトのお世話になり続け、それをやはり古いPCが月に一度だけ処理してくれています。愛車の走行距離も、やがて20万キロに迫ろうとしています。何よりも、家族や古くからの友人・知人、新しく出会ったものの随分昔からのご縁のようにしか感じられない方々...。不思議なつながりで、支えられ続けていることに、ふと、しみじみ感じ入ります。大げさでしょうか。

古の名文に拠らなくても、全ては移ろい、ひと時として留まることを知りません。目先のことに引きずられ、大切なことを見失ってしまったりは本末転倒ですが、意外にそれにはまってしまっている場合が少なくないようです。

細事に囚われず、大事を失わないようにくれぐれも気をつけていきたいものです。(は)



のと  
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち  
03-5537-3078  
17:00 ~ 23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27  
プラザ銀座ビル地下1階  
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2020/10  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>  
〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2020/10  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 神意月



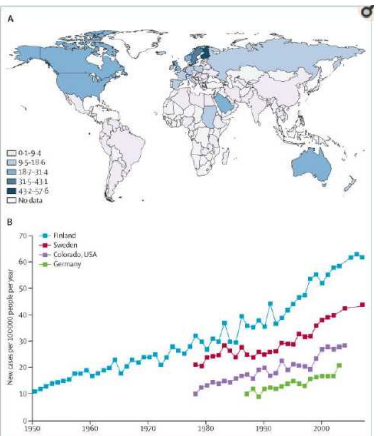
TVロケ地の小学校跡  
岐阜県郡上市にて  
by hama

～一型糖尿病は意外に多い～

前回に引き続き、一型糖尿病の話です。小児は統計が取りやすいので、発症は十万人当たり年に二十三人であることが知られています。北欧に比べると三十分の程度で、日本では稀な疾患とされてきました(図: Lancet.2014 Jan 4;383(9917):69-82から引用)。しかし二〇一六年から厚生労働省が行なった全国調査の結果、日本人における一型糖尿病の有病率は約0.1%と意外に高いことが判明しました。千人に一人の割合です。少し大きな企業や町内の何処かに一人、毎日四回のインスリン注射を必要としている人がいる計算です。また我々医療者にとって一型は小児期発症というイメージでしたが、成人発症も多いようです。私の外来に通院されている一型の患者さんも、二十五人のうち十三人は二十歳以降の発症でした。日本では一型に対する認知度が低く誤解も多いため、周りには伝えていないという方が殆どです。

～一型糖尿病と免疫～

一型糖尿病は、私たちの体内で外敵と戦ってくれるはずの免疫細胞が、なぜか私たち自身の細胞を攻撃してしまう病気です。免疫細胞の攻撃は徹底的ですから、膵臓の細胞は完全に破壊されて体内で作られるインスリンはほぼゼロになっています。細胞は「インスリンの合



【プロフィール】  
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。

成・備蓄を常に行いながら、血糖のわずかな変化にも敏感に反応して必要な量だけ瞬時にインスリンを放出する」という、現代科学では代用のメドが立たないほど高度な機能を備えた細胞です。そうした高度な細胞ほど、一度失われるともう再生も増殖もしません。

そんな大切な細胞を、間違いとはいえないなぜ攻撃してしまうのでしょうか。前回述べたように外から侵入した微生物(多分ウイルス)と細胞が似ているからと考えられているのですが、風邪をひいたら全員が一型糖尿病になるわけではありません。持って生まれた体質は、明らかに関係しています。しかし体質的には同一と考えられる一卵性双生児で一方が一型を発症していても、もう一人が一型になる確率は約五十%でしかありません。免疫は、まだまだよく判っていない領域です。

～免疫細胞の暴走～

今回の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)においても、重症化するメカニズムとして免疫細胞の関与が指摘されています。それは「サイトカインストーム」と呼ばれています。一型糖尿病とは違ってどちらかというとアレルギーに近い反応です。例えばスギ花粉が鼻から入ってきた時には、数回クシャミをして外に弾き出して終了するのが正常な反応です。それなのに必要以上に繰り返してクシャミするだけでなく、異物を洗い流すための液体(鼻水)まで溢れ出す過剰な反応をおこすのがアレルギーです。COVID-19でも、ウイルスが増えることによる影響よりも免疫細胞の過剰な反応の方が重症化に深く関与しているようです。何らかの原因で、免疫の抑制が外れてしまうためと考えられています。

## 濱の起業塾 十八 『起業』

事業のウチとソトで、起業活動を支えるスペシャリストたち。

ウチは、事業をバックヤードで支えるチーム。製造業で例示すると分かり易いかと思うが、生産やサービスの提供の欠かせないコアな技術の開発と実用化を始め、調達・生産計画・設備投資に関連する業務。と、それらをさらに支える財務と労務。職名的には、経営コンサルタント、キャピタリスト、税理士・会計士、司法書士、リクルータ、労務士となろうか。

ソトは、製品を商品化するためのマーケティング、製品の価値を伝え顧客とのコミュニケーションを図るためのデザイン・値決め、販売・流通ルートの開拓、広告宣伝。さらには、類似品から防衛するための知的所有権・商標権などの確立。職名だと、マーケティング、デザイナー、弁理士・弁護士。さらにブランディングに長けた協力者。

内側の体質を筋肉質にし、外で接する世間・顧客とのコミュニケーションを豊かにし、両者をバランスよく進化させ続けていく。これが、民間事業の真髄なのだと考えている。これらの点は、社会的な価値・意義を以って進めようとする社会事業についても全く同じである。社

会事業は、その地域社会に価値を理解され、必要性を求められるならば、根付いて社会の要請と共に拡がってゆくことだろう。しかし、それが的確に伝わらなければ、価値あるモノとすら認識されず、結果的に事業の継続が困難に陥る。

起業の価値を自ら任ずる起業家の中に、その価値に自信を持つ余り、理解されて当然という姿勢の方を見受けることがあるが、価値とは、相手側にも同等に認めてもらってこそ共有可能なもので、一方的に押し付けられる性格のものではないと思うが、如何であろうか。

さて、これらのスペシャリストに囲まれて、事業が動き出すと、ゼロから一を生み出す創造性よりも、事業の拡大ペースの制御と、日々分かれ大きくなっていく部門と、その間の調整に重要性がシフトしていく。無から有を創り出した起業家は、現場から離されたようで寂しさを感じるかもしれない。一を十に、十を百・千・万にしていける起業家は、マネジメントと幾重にも繰り返す意思決定にこそ、存在意義を感じるのではないか。この違いこそ、事業の限界を決めている。

生粋の技術屋だった本田宗一郎氏が、マネジメントの天才ともいえる藤原武夫氏と二人三脚を組めたことで、ホンダが町工場を脱し世界企業となる礎を築けたのではないかと思うのである。

JR東日本の車内誌「トランヴェール2020年8月号」の特集は「アイヌ民族は交易の民だった」であった。アイヌ民族に関しては、中学校の修学旅行では有珠山付近の博物館でアイヌの踊りを見学したこと、青森市の稽古館（現在、あおもり北のまほろば歴史館の前身）にて30年ほど前に津軽アイヌと下北アイヌの写真を見て印象に残っていたことのほか、青森県や秋田県にはナイ（内）、ペツ（別）などアイヌ語由来の地名も多く、アイヌが極めて身近な存在である。今回は「交易の民」という点に着目し、この特集記事を紹介する。

これまでのアイヌ民族のイメージとして「狩猟・漁労・採集」「文字を持たず口承」「和人との闘い」というものであったが、アイヌは北方世界の広大なネットワークを活用し、主に北海道を中心に日本列島、樺太、千島、カムチャッカ半島、アムール川流域（ハバロフスクから下流）などとのつながりから「交易の民」として栄えてきた歴史と文化がある。この北方への交流圏の拡大は15世紀まで続いたが、逆に南の東北北部からは6世紀頃までに撤退している。これはヤマト勢力の北上圧力が次第に高まってきて、8世紀前葉には秋田市の古代城柵・秋田城（律令国家による統治の拠点、北方交流の窓口）に交易が集約されたことによる。

アイヌが和人（日本）に対する交易品は、毛皮が主品目であったとされ、アイヌが道内で生産されたもの、北方の諸民族との交易で得たものなどを供給し、その交換品としては鉄器具、漆器、布地などであった。特にアイヌは農耕のため鉄器具を求めていた。瀬川拓郎氏（旭川市立博物館 札幌大学教授）によると、「アイヌの視点は、いつの時代も常に日本に向けられている」とし、北方の民族との交易\*もその土地にあるお宝を日本に移出させるためのものと見られている。今年7月には、アイヌ文化の復興・発展の拠点として、北海道白老町に民族共生空間「ウポポイ」が開園し、そのなかに日本初のアイヌを主題とした「国立アイヌ民族博物館」が開所した。基本展示室は「ことば」「世界」「くらし」「歴史」「しごと」「交流」の6つのテーマでアイヌ民族を紹介しているが、今回はその「交流」展示についてのみ一部を紹介した。また、これまでアイヌの歴史・文化を伝えてきた二風谷アイヌ文化博物館（日高支庁平取町）、上ノ国勝山館（かつやまでて・渡島支庁上ノ国町）なども「ウポポイ」と併せて訪れたい場所である。

\*アイヌが介した交易は、17～18世紀頃の山丹交易（北のシルクロードとも呼ばれる）がある。これは樺太や宗谷アイヌとアムール川流域の山丹人と呼ばれているウルチやニヴフなどの民族との交易で、中国本土や清朝の豪華な綿などの産品が松前藩にもたらされた。その綿はブランド品として流通した。「蝦夷錦」と呼ばれる清朝の礼服（官服）は、北海道博物館（札幌市）や青森県下北半島佐井村の津軽海峡ミュージアムに展示されている。

今から25年前に新入社員だった頃、取引先との会食の場に同席する機会がありました。目上の方と会話をつないでいくための経験や技術もない当時23歳の若者は、これならば話が盛り上がるはず!!と自信をもって先方の部長さんにある質問をしました。「〇〇さんはどのチームの野球ファンですか？」僕にとっては鉄板の盛り上がりネタでした。ところが部長さんから帰ってきた返答は、「川島さん、仕事上の会食の場で相手に聞いてはいけない質問が2つあるんだよ。1つはどこの球団のファンか？ということと、2つめはどこの宗教・政治を支持しているか？ということ。宗教の理由はわかるよね。ではなぜ野球の話題がよくないか？私が巨人ファンではない、アンチ巨人だからだよ。」なんだよそれー!!!という感じですが、仮に私が巨人ファンだとした場合、部長が巨人が嫌いだと聞いて果たして話を盛り上がったか？もっと言えば僕自身が自分の考えをもって正対できるのか？と考えたところ部長もあえて僕が自分自身に嘘をついてまでアンチ巨人ファンを演じさせないような心遣いにも思います。つまり会食や飲み会のような場では、個人の深い嗜好に関わるような話題をすべきではないと学んだことを覚えています。

さてあれから四半世紀がたち時代は令和です。何が変わったのでしょうか？  
ネットで検索をしてみると

- ・好きなスポーツチームの話はおすすめ
- ・宗教、政治の話はNG、・個人のSNSの話題はNG とあります。

好きなスポーツやチームの話はおすすめになっているようです。プロスポーツの多様化や野球においては各球団が地域密着型経営や魅力ある球団づくりをした結果であったり、昨今はチームよりは、世界で戦う選手個人を応援する構図による変化でしょうか。また覇者のチームが違うからといって、それが企業間の取引や関係づくりにおいて影響を与えることはないダイバーシティや包容力を日本社会にも根付いた気がします。宗教や政治の話は変わらずNGのようです。これに関して25年たった今の僕が思うのは、個人の嗜好性云々もあるでしょうが、それよりも宗教と政治についてその成り立ちや歴史上での変遷を理解ができていないため、きちんと語れないというのが根底にあるのではないのでしょうか。3つめに書いたSNSの話題がNGなのはまさに令和的です。個人情報や特定されてしまうリスク、そこに書かれてある内容如何でトラブルになってしまう可能性があるというのが理由だそうです。

僕自身も仕事や地域活動において、新しい人達との人間関係を築いていくにあたり、会話の糸口であったり、信頼の構築というのは年を重ねても大変だなあ、いや年を重ねていく毎に大変なっていくなあと感じます。社会的な立場や個人に付帯する余計なものに囚われがちになります。子どもたちの仲間づくりは、目的に対して純粋に人が集まって活動していて、あー本当はこうあるべきだよなあと感じます。言い合いをしてもすぐ仲直りできるのがわかっていれば、いくらでも自分の考え方を述べて議論ができる。そういう考え方が根底にあれば、宗教や政治の話なんかも決してタブーではなく、お互いを分かり合うための重要なテーマなんだけどなあ。

『富士の国から ~大魔神のたび~』200813富士紡遺産復活物語  
神奈川県南足柄市企画部・都市部・教育部参事 溝口 久

小山町にある豊門公園を案内している時に必ずお客さんに尋ねることがある。「何かの臭いがするのですが、何でしょうか?」と。実はあまり香る草木はない。寄付銘版、ベンチをご覧になると分かる。そう、金の臭いがするのである。ふるさと納税をフルに遣っての整備ではあるが、他にも寄付をお願いしてきた。お金が不足していた訳ではないが、寄付という形で多くの方々はこの事業に関わって欲しかったからだ。ベンチには町民有志の方々のメッセージ入りネームプレートが付いている。豊門会館の名の由来となった日比谷平左衛門像にはご子孫から、和田豊治像にも和田薫幸会からのご寄付を頂戴している。正面入り口そばの寄付銘版には町内企業はもとより、連名の町民、小生の友人の企業も名を連ねている。

町は平成20.21年に富士紡から取得した豊門公園を一般開放することを目的に樹木の伐採、園路、屋外トイレ、パーゴラ、ベンチを整備した。この一角に住民参加でつくる花壇があり、木の電信柱を並べ花壇の枠としていた。特に花もなく美しいといえるようなものではなかった。小山町に着任早々、込山町長から「歴史的云われある公園なんだから、それらしいものに」との指示をされた。建物もロケに使われる程度で普段は閉ざされていた。特に西洋館の痛みはひどく、外壁には穴があき、中が見えるほどになっていた。当然のことながら町民からは修繕の要望が出されていた。しかし、特に必要性がない建物にかけられるお金が回ってくるほど財政は豊かではないし、指定ではなく登録文化財では国からの補助金もない。そこに降ってきたのがふるさと納税だ。県内の自治体が大金を集めるようになり小山町でも遅ればせながら導入するようにと町長から指示を受けた。企画していいのならば、寄付の目的先に「文化財の保護・利活用」を加えた。ここに全体の一割程度の寄付が集まってきた。

小山町に来て三年目にしてようやく富士紡の遺産改修に着手できる目途が立った。まずは豊門公園を修景することを豊門会館と西洋館の改修に先駆けて行った。「建物だけでいいのでは」との声もあったが、無視した。建物と庭は一体であると考えていることと、庭は外から見えるものであるから変化がわかりやすいことが理由にあった。

豊門会館の大改修には役場でかつて担当されていたOBの土屋さんから、「元々は清水組、今の清水建設が施工しているから、声掛けしてみたらどうか」のアドバイスがあった。当時、富士紡の工場建屋も清水が建設していた。今となっては、その事の記憶が清水にはなく、この声かけにより初めて知ったほどであった。歴史的建築物の改修に実績もある清水建設は、早速に改修後のイメージ図を持って来られた。豊門会館の裏庭に池があり、そこに写り込んだ姿がいかに美しい絵が目の前に現れた。

これを見せつけられると実現したくなるのが人情。設計者を決めるためにプロポーザルに出したところ、西洋館前にはフランス式庭園を豊門会館周りは和風庭園

を配し、景観の変化を楽しみつつ回遊できる散策路を提案した「フィールドフォーデザインオフィス」というランドスケープを専門とする事務所が選ばれた。できあがりを見ると公園を修景したというより庭園に変えたと言った方が相応しい。桂並木の正面に日比谷の銅像、園内の数ある碑には銅製の説明板、バラ園、豊門会館が映り込む水盤、モスグリーンの寄付ベンチ全てにこだわった新生豊門公園になった。その後の心配は維持管理のことである。「いいものであれば、人は真剣に手入れしようとするけど、中途半端なものは大切にせず荒れてくる」は身をもって経験したことからくる持論だ。幸い地元の田代さんと上田さんが名乗りを上げてくれ、集落支援員という制度により仕事としてほぼ毎日手を入れてくれることになった。

次は建築だ。豊門会館は傷んだところを直すことを基本にしている。変えたといえば、エレベーターを付けたこと、住み込みの管理人がいたスペースを管理事務ができるようにしたことぐらい。2階の広間は宴会場として使われていたことを踏襲したく、エレベーターは料理を運ぶことをイメージしていた。完成の暁には大宴会をと思っていたが、町長が代わったことでそれも叶わず、開館お披露目もない様になってしまった。

もう一つの建物「西洋館」は富士紡が青年学校として建築したが、後に社員寮として使っていた。窓はアルミサッシに変えられ、増築もされていた。昭和5年の建築当時の図面を発見することはできず写真のみを頼りに外観のみを復元することとした。そこで内部の1階はフランス式庭園、豊門会館の眺めを楽しむカフェ&レストランに、2階を富士紡が進出してきたころのお話とその後の小山町との関係がわかる歴史ギャラリーにすることがベストと考え計画した。

カフェ&レストランは「道の駅ふじおま」を運営する(株)ふじおやまと相談し厨房の整備をする予定であったものが町長交代により撤回。そうでなければコロナ禍と言えども何かしらの営業はあったかと思う。2階の歴史ギャラリーは相当に手間をかけた。富士紡進出にあたり功労のあった岩田蜂三郎に光を当てて欲しいが込山町長のリクエストでもあった。氏の命がけの地元の説得が無くして富士紡の進出はなかった。水力組が紡績工場の適地として鉄道があり水の豊富な小山に目を付け、相談をしたのが蜂三郎だった。工場誘致で地域振興をなんて考える人は皆無、江戸時代から殆ど変わることなく代を繋ぐことを至上とし日々の農耕生活を営む村集団に鉢三郎がいたことがこの町の奇跡と言っても過言ではない。今にあっては内陸フロンティアの600haもの開発を突き進めた込山町長の存在も奇跡とも言える。言うことは誰でもできる。込山町長は実現のために人材を外部に求めたことが大きい。これとて相当な人脈と情熱がないとできぬこと。いつの時もまちづくりは人なのである。8月から務めている南足柄市でもよそ者として内部の者が思いもよらない仕事を推し進め始めた。どんなことを仕掛け仕上げていくかは、この先のアスリックニュースで報告したい。

